

# 仏心と葬弁儀 ーその17ー

## 「三顧の礼」で迎える

初仕事で運命的な出会いを果たした飛田とTさん。Tさんは当時、製紙会社に勤務するかたわら、自宅のあった富士見では通学する小学生たちの交通安全のために自ら町内会に働きかけて「ちびっ子道路」を実現させたほか、言語に障がいのある子どもたちの「親の会」を創設して会長を務めたばかりでなく、市内の障害者団体連絡協議会の副会長を引き受けるなど、率先して社会教育・福祉活動に尽力されていました。のちに、このことが認められ、昭和48年には北海道知事から「北海道善行賞」を贈られることとなります。

飛田と出会って以降も、何くれとなく会社関係や町内での葬儀を飛田に紹介してくれているTさんでしたが、3年ほどして一身上の都合で会社を辞められたことを聞いた飛田は、以前より「人生の先達」として並々ならぬ敬意と親愛の念を抱いていたTさんが「一緒に仕事をしてくれたなら、どれほど心強いだらう」と考え、まさに「三顧の礼」をもって丸和堂への入社を懇願したのでした。

ここまでされては、Tさんならずとも承諾をしないわけにはいかなかったでしょう。若いながらも飛田の誠実な仕事ぶりと熱心さを買っていたTさんは、何の肩書きもいらないという条件で丸和堂入りを承諾してくれたのでした。ここに初めて飛田とTさんという年齢の離れた丸和堂の両輪が誕生し、社業の更なる発展への原動力となったのでした。

## 仕事に生きた人柄

「Tさんは周りの誰からも好かれる人柄で、何より実に面倒見がよかった。それが福祉分野でのボランティア活動にもつながっていたのですが、葬儀という仕事においてもそうした温かな人間味により、実にスムーズに仕事が進んでいきました」と飛田は当時を振り返ります。

その当時、丸和堂における葬儀の仕事の多くの部分を、Tさんが勤めていた製紙会社と富士見周辺での葬儀が占めていたことから、人間同士のつながりがいかに大切かということがうかがい知れます。

「仏縁・奇縁」という言葉がありますが、この飛田とTさんとの出会いは、葬儀業を始めたばかりの若者と、初仕事として自らの親の葬儀を彼に任せた喪主としてのものでした。実社会における人間関係といえば、「生き馬の目を抜く」と言われるほどシビアなものが常なのですが、後に生涯を結び付けるほどの契機となった二人の出会いには、まさに因縁といってもよいほどの不思議さを感じられます。

まさに発展途上にあつた丸和堂が後に、生活保護世帯や3歳児未満の子どもの葬儀料を半額に設定するなどのサービスを始めたのも、こうした二人の出会いから生まれた想いが結実してのことだったのです。

・つづく・

■次回の掲載は一月二十三日(土)を予定しております。